

櫛形町文化財調査報告 No—13

柿 平 B 遺 跡

—— 櫛形町柿平土地区画整理事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

附 町内遺跡試掘調査報告

1995

櫛形町教育委員会

序文

櫛形町は、陝西地方の中央に位置し、櫛形山の山麓に発達した町であります。2万年以上まえから人々の生活が始まり、以来長い歴史の中で常に陝西地方の中心として栄えてきました。

本町の中心「小笠原」は平安時代から鎌倉時代にかけて小笠原氏の氏祖《小笠原長清公》が館を構えたところといわれています。

今回櫛形町では、町の総合的な都市計画の中で、地域の整備と健全な市街地の造成と供給をおこなう事を目的として、本町の中心市街地に隣接する小笠原字柿平を中心とする地域 27.6 ha について、「陝西都市計画事業 櫛形町柿平土地区画整理事業」を計画しました。

櫛形町教育委員会では平成4年度に事業予定地内における遺跡の所在・規模等を確認するための調査を実施したところ、3ヶ所で遺構を確認したため事業実施に先だって埋蔵文化財の保護をはかるために、今回国・県の補助を頂き、発掘調査を実施しました。

幸い、今回の調査において多くの重要な事柄が発見され、さらに従来の知見に付け加えるべき新たな事実も確認することができましたことは、本書に述べる通りです。

この調査の結果が、地域を知り、地域の歴史を次代に伝えていく意義ある資料として活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査、ならびに報告書作成において種々ご指導、ご協力いただきました皆様に心から感謝申し上げる次第でございます。

平成7年3月

櫛形町教育委員会

教育長 沢 登 孝 弘

例　　言

1. 本書は、平成6年度文化財保存事業補助金をうけて実施した櫛形町柿平土地区画整理事業地内遺跡発掘調査及び、町内遺跡試掘調査の報告書である。
2. 遺跡は、山梨県中巨摩郡櫛形町字柿平他に所在する。
3. 調査を実施した年月日は以下の通りである。

柿平土地区画整理事業地内遺跡

現地調査　　平成6年4月20日～同年6月7日

11月7日～ 同月10日

整理作業　　平成6年12月～平成7年3月31日

それら以外の調査については、文中に明記してある。

4. 調査組織は以下の通りである。

調査主体　　櫛形町教育委員会

調査担当　　清水 博（櫛形町教育委員会）

調査事務　　櫛形町教育委員会

5. 発掘作業参加者

相川はるみ	相川みさえ	齋場うき乃	甘利千恵子	石川 千年	川崎しげみ	神田久美子
桜田 和子	桜田 定子	桜田みさえ	桜田みさ子	長沼 豊子	中島 由美	深沢真由美
古都フミ子	由比 伴一	アレックス・イエム				

6. 整理作業参加者　若林 初美

7. 本報告書作成の業務分担は下記の通りである。

第Ⅰ～附章一 清水、遺物の実測・トレースー若林

8. 本書作成にあたり下記の方々から、ご指導・ご助言をいただいた。記して謝意を表する次第である。

小野 正文・保坂 康夫（山梨県教育庁学術文化課）、

田代 孝・新津 健・出月 洋文・中山 誠二（山梨県立埋蔵文化財センター）

山路恭之助（須玉町教育委員会）

発掘調査にあたって、櫛形町柿平土地区画整理事業組合をはじめとして各事業主体者の方々に物心ともに様々なご協力をいただいた。あわせて謝意を表する次第である。

9. 発掘調査によって得られた出土遺物、記録図版及び写真等は櫛形町教育委員会において保管している。

凡　　例

- 1 遺構実測図の水系レベルは海拔高を示す。
- 1 遺構図及び遺物出土位置図等現場において作成した図面はすべて国家座標基準系によっている。
- 1 スクリーン・トーンは版筆面を示す。

目 次

序 文

例 言 (凡 例)

第Ⅰ章	調査の目的と方法	1
第1節	調査に至る経緯と目的	1
第2節	調査の方法と経過	2
第Ⅱ章	遺跡を巡る環境	2
第1節	自然環境	2
第2節	歴史的環境	4
第Ⅲ章	発見された遺構と遺物	6
第1節	発見された遺構	6
第2節	出土した遺物	11
第Ⅳ章	調査の成果と課題	12
附 章	これまでの町内遺跡調査の成果	13
第1節	伝嗣院原遺跡の調査	13
第2節	小笠原警察署野之瀬警察官駐在所 建設用地内（清水C遺跡）試掘調査	14
第3節	山際住宅団地造成地内（善徳院遺跡隣接地）試掘調査	15
第4節	善徳院横遺跡隣接地における宅地造成に伴う試掘調査	15
第5節	切付遺跡の調査	17
第6節	パチンコ出店（ジャンボ）に伴う大新井C遺跡等の試掘調査	19
第7節	ケーヨーホームセンター建設用地内遺跡確認調査	19
第8節	農道4号支線2号線開設に伴う試掘調査	22
第9節	ヤオハン建設用地内（往還東A・B遺跡）試掘調査	23
第10節	宝珠寺収蔵庫建設用地（宝珠寺遺跡）の発掘調査	26
引用・参考文献		28
報告書抄録		28

擇図目次

第1図	柿形町柿平地区土地区画整理事業総合現況図及び発掘区位置図 [1/6000]	1
第2図	遺跡周辺地形図 [1/15000]	3
第3図	遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 [1/25000]	5
第4図	柿平B遺跡全体図 [1/400]	7
第5図	1～8号溝状遺構・9号溝(1) [1/240・1/60]	8
第6図	1～8号溝状遺構・9号溝(2) [1/60]	9
第7図	1・2号土壙・基本土層図(南壁) [1/60・1/300]	10
第8図	出土遺物 [1/3]	11
第9図	伝廟院原遺跡周辺地形図及び発掘区全体図 [1/5000・1/1000]	13
第10図	清水C遺跡周辺地形図及びグリッド配置図 [1/5000・1/1000]	16
第11図	山際住宅用地造成地内試掘グリッド配置図及び同土層概念図 [1/2400・1/60]	16
第12図	切付遺跡周辺地形図 [1/5000]	17
第13図	切付遺跡遺構全体図、同セクション図 [1/600・1/300・1/120]	18
第14図	大新井C遺跡及びケーヨーホームセンター建設用地内トレンチ配置図	
	及び土層概念図 [1/1500・1/60]	20
第15図	大新井C遺跡、往還東A・B遺跡周辺地形図 [1/6000]	21
第16図	農道4号支線2号線内グリッド配置図 [1/5500]	22
第17図	ヤオハン建設用地グリッド配置図、同土層概念図 [1/3000・1/60]	24
第18図	宝珠寺周辺地形図 [1/5000]	26
第19図	宝珠寺発掘調査全体図、及びセクション図 [1/360・1/120]	27

写真図版目次

図版 1	(1) 柿平地区土地区画整理事業全景
	(2) 柿平B遺跡遠景
	(3) 柿平B遺跡全景
図版 2	(1) 1号溝状遺構
	(2) 1号溝状遺構セクション
	(3) 1号溝状遺構セクション
図版 3	(1) 1～8号溝状遺構西端部
	(2) 1号土壙
図版 4	(1) 2号土壙
	(2) 9号溝
	(3) 試掘トレンチ土層断面
	(4) 試掘トレンチ土層断面

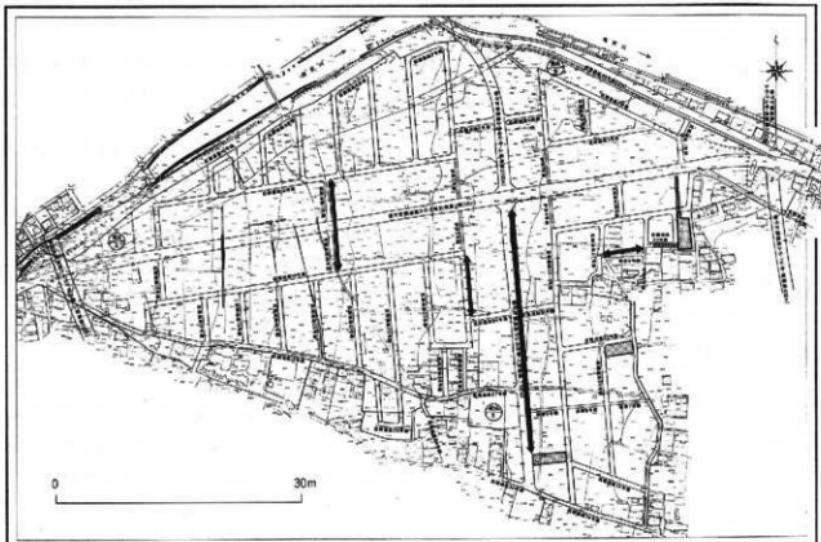
第Ⅰ章 調査の目的と方法

第1節 調査に至る経緯と目的

柳形町では、本町の中心市街地に隣接する小笠原字柿平を中心とする地域（第1図）について、本来あるべき機能を有する居住空間を創設するために、都市計画との整合を図りつつ、健全な市街地の造成と供給を行う事を目的として土地区画整理事業を計画した。同事業は名称を「峠西都市計画事業 柳形町柿平地区区画整理事業」とし、平成4年6月13日に設立された『柳形町柿平地区区画整理組合』を事業施工者として、平成11年春の完成をめざして行われる事となった。その対象面積は27.6haにおよび、柳形町小笠原字柿平（一部）、同字一ノ出しの一部、大字上宮地牧野の一部及び大字桃園字西原の一部を含むものである。

ところで、同事業予定地内には6ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認^{*1}されており、その一部ではかつて試掘調査が実施され若干の土器片が出土^{*2}している。また事業予定地東には「小笠原長清館跡」に比定^{*3}されている小笠原小学校が存在し、その一部は試掘調査^{*4}が行われている。そのため、柳形町と柳形町教育委員会では、区画整理事業に先だって国・県の平成4年度文化財保存事業費補助金をえて事業地内における遺跡の所在・規模等を確認するための調査を実施した。^{*5}

試掘調査の結果、3ヶ所において、遺構あるいは遺構らしきものを確認する事ができた。それらは事業区のほぼ東辺あるいは南辺に集中し、從来から埋蔵文化財包蔵地として確認されていた地点であった。特に事業区東端部に近いM区は柿平B遺跡とほぼ重複し、良好な遺物が出土していた。出土した遺物は主に中世から近世にかけてのものが主であった。そのため、先述した事業予定地東に隣接していたとされる小笠原氏館跡に関連する遺構が確認されるとの期待ももれた。そこで、町教育委員会では、遺跡保存について柿平地区区画整理組合と協議に入り、試掘調査時に遺構・遺物を確認した3ヶ所について事業開始前に記録のための調査を実施する事、調査費用については基本的に柿平地区区画整理組合が負担し、一部については国・県の補助を得なが



第1図 柳形町柿平地区区画整理事業現況図及び発掘区位置図 [1/6000]

ら町教育委員会において負担することとした。また試掘調査では、地表下1.5～2m程掘削したのみであったため事業に伴う深部掘削にあわせ、事業地内数ヶ所において基本土層の観察等を行うとともに遺構・遺物の存在を再確認することにも協力を得ることで合意した。

本区画整理事業は、平成5年11月27日にその第1期道路築造工事起工式を行い、都市計画道路・区画道路・上水道工事等を開始した。町教育委員会では平成6年3月に上水道工事に伴う一部立会を行ったが、本格的な発掘調査は年度をあらためて平成6年4月20日に開始した。調査は同年6月7日に完了したが、その間も調査にあわせて事業地内数ヶ所において、掘削立会・基本土層の観察等諸情報を収集した。

第2節 調査の方法と経過

調査は、平成6年4月20日に開始した。基本的には、試掘調査時に遺構あるいは遺構らしきものを確認した3ヶ所について調査を行った。区画整理事業地東北部（試掘調査時M区）を1区、同東辺（試掘時I区）を2区、同東南部（試掘時K区）を3区と呼称した。試掘時に溝状の遺構を検出した1区については、試掘時に遺構を確認したグリットを中心に1600m²を調査した。2・3区では試掘時に遺構を確認したグリットを中心に、幅3～4mのグリットを設定し、2区では20m、3区では30mに及んだ。総調査面積はほぼ1800m²に達した。また、本事業に伴い上水道の本管を埋設するため地表下5m程度まで掘削した箇所については、工事事業者のご協力を頂き、遺物の確認・基本土層の観察（写真撮影）等を実施した。

1区では35×40mの範囲を発掘区として設定した。さらに遺構が北・西方向へ延長するか否かを確認するため幅4m弱のトレンチを北へ50m、西へ17mほど設定した。区画整理事業工事用に設定していた基準軸を利用して国家座標第Ⅳ区を用い10m方眼のグリッドを設定した。遺物の取上げ、遺構の図化にはコンピューター・システム株式会社製のプログラム「S I T E」を使用し、光波測量器、コンピューターを利用し迅速かつ正確を図った。

3区では試掘時に溝を確認した2個のグリッドを結ぶ様に東西方向に幅4m、長さ30mのトレンチを設定し約120m²にわたって遺構の検出に努めた。当初、試掘時の確認面である耕作土直下で精査を行ったが遺構・遺物の発見には至らなかった。そのため、すぐ西に近接して掘られていた工事用の掘削面（地表下2.5m）まで再度重機によって掘り下げ、精査を実施したが数点の土器を発見したに止まった。

2区は諸般の事情により、1・3区と同時に発掘調査を実施することができず、平成6年11月に調査を実施した。試掘時に溝を確認したグリッドを通る様に東西方向に幅4m、長さ20mのトレンチを設定し約80m²にわたって遺構の検出に努めた。しかし3区と同様、わずかな土器を得たにすぎない。

調査は、各区とも遺構確認面まで重機によって排土し、後人力によって遺構の検出・掘下げに努めた。調査時期は梅雨時に重なったが雨が少なく天候には恵まれた。しかし、土は基本的に礫あるいは礫が大量に混入した土でしかも乾燥のため固く縮まっていたため作業は困難を極めた。

第Ⅱ章 遺跡を巡る環境

第1節 自然環境

柿平遺跡は、山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原字柿平に所在する。

櫛形町は、山梨県の西部中央に位置し、山梨県元標（山梨県庁）からは約14kmの距離を隔てている。甲府盆地から西を望むと、南アルプス連峰と呼ばれる冬期白雪を頂く赤石山脈を仰ぎ、その前方にはやや高度の低い巨摩山地を望む。巨摩山地の中央には、櫛形山と呼ばれる大きく櫛の形をとった山塊がそびえているが、櫛形町はその山裾に発達した町で町名も櫛形山に由来するものである。

櫛形町は地誌的、地形的に大きく三様に区分され、それぞれ極めて対照的な特徴を示している。すなわち町内の西半部では櫛形山が大きな山容を誇り、中央部はその東麓に発達した市之瀬台地が占め、東半部は櫛形山から

流れだした諸河川がつくりだした扇状地となっている。

櫛形山を主座とする巨摩山地やその背後に連なる赤石山脈は糸魚川—静岡構造線の一部をなしているが、そのため櫛形山にも山腹に幾条かの断層崖地形が刻まれている。櫛形山の中腹に南北に連なる高尾、立沼、伊奈ヶ湖、泊平等の平坦面や沼地は伊奈ヶ湖断層によって生じた盆地を成因とするものである。さらに巨摩山地は上市之瀬断層によって、標高400~500mで傾斜変更線を経て市之瀬台地と接している。

櫛形山の東麓にひろがる市之瀬台地は、上市之瀬断層前面に発達した更新世の扇状地が、甲府盆地形成に与った最も新しい地殻変動によって形成された丘陵状の地形である。台地は南北4km、東西2.5kmの扇形平面を呈し、標高は400~500mを示している。台地前面は北高差100~120mを有する下市之瀬断層崖を経て盆地床の扇状地へ至る。台地上面には新期信州ロームに対比される伝嗣院ローム層が覆い、その下部には古御岳由来する黄白色軽石層(Pm-1)が存在する。

この市之瀬台地上面には、北から高室川・深沢川・漆川・市之瀬川・秋山川等が流れ、侵食地形を刻んでいる。櫛形山を水源とするこれらの諸河川は、上流では 18° ~ 22° という急激な勾配をもって流れ落ち、盆地床にいたると急激に流勢を弱め、みずから割り流した大量の土砂を堆積させる。こうして谷の出口から扇状地を造るが、これらは、有名な御動使川の形成する大扇状地と相まって複雑な「複合扇状地」をなしている。これらの扇状地にあたるこの一帯は古来から「原七郷」とよばれ「原七郷は月夜でも焼ける」といわれるほど極めて地下水位が深く水に乏しい乾燥地で、かつ豪雨時には洪水におそれれる水田經營に不適な地勢である。

地下に滲みこんだ水は扇端部では再び湧きだして、若草町の鏡中条・十日市場、甲西町の江原・鮎沢等と弧状に連なる湧泉列をなしている。この湧泉列から低位は極めて水の豊富な一帯となり、釜無川の形成する氾濫原へ続いている。この氾濫原は水田經營を主体としてきた地域で、古来「田方」と呼ばれ、水に乏しい扇尖部は乾燥



第2図 遺跡周辺地形図 [1/15000]

地帯で、「原方」と云われ桑畠や果樹園に利用されてきた。また、台地から扇頂部にかけては「根方」とよばれ、山の根にあって、谷川の水を利用した水田や台地上の畑に依ってきた。このようにこの地域の自然環境の特質はそれぞれの地域の生活・文化等と有機的な関係を示し、まさに地誌的な特徴を顕している。

今回調査を行った柿平地区は、櫛形町のほぼ中央部に位置し、市之瀬台地を流れ下ってきた深沢川の形成した小扇状地とほぼ重複し、区画整理事業北辺はこの深沢川によって画されている。事業地西端部は深沢川の谷出口となって、東・西方向へ扇端部に向かって降っている。該地の標高は300～340mを測り、西半部ではややきつい傾斜を示すが、316mの等高線付近からは穏やかな傾斜に変わる。この小扇状地内では、微地形的に幾つかの谷部が観察されるが、これは現河道確定前の旧河道の痕跡とも考えられる。また事業地北端部は、台地のさらに北から流れ出る高室川との合流点となり、地元の古の話によても明治以前は常に洪水におそわれた場所であると伝えられる。

第2節 歴史的環境

釜無川の右岸、櫛形山の山裾に発展した櫛形町は、西半部を櫛形山とその東麓に形成された市之瀬台地が占め、東半部は盆地床跡の扇状地となっている。すなわち地形的に大きく山地・台地・扇状地に分類され、そのため地誌的にも極めて対照的な様相を示していることは前節において述べたところである。

遺跡詳細部分調査によれば、町内には現在245ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。遺跡は主に台地、扇状地上に認められるが、櫛形山中の断層によって生じた平坦面にも縄文時代を中心とする遺跡が僅ながら確認されている。また、最近の甲西バイパスに伴う事前調査によって、従来「田方」と呼ばれた厚い堆積土に覆われた冲積地において多くの遺跡が確認され、調査が実施されている。

町内において最も古い歴史的遺物は旧石器時代に由来するもので、市之瀬台地上からは数ヶ所（六科丘遺跡・長出ロ遺跡・長田A遺跡）にわたって旧石器時代にさかのぼる遺物がえられ、県内でも古い時代から人類の生活の場であったことを語っている。この台地上では以来、縄文時代・弥生時代を通じて遺跡が営まれており、特に縄文時代中期（長田A遺跡・長田B遺跡・中畠遺跡・東原A、B遺跡・上の山遺跡・古屋敷遺跡・かに原遺跡）、弥生時代終末（六科丘遺跡・長田B遺跡・上の山遺跡等）の良好な集落遺跡が点在する地域である。この台地の縁辺部ではまた、いくつかの前期古墳（物見塚古墳・六科丘古墳）が連続して築造され、その時代に於ける地域の中心であったことを示している。台地下の扇状地では、台地裾部を中心に縄文時代・弥生時代所産の遺跡（曾根遺跡・北峰遺跡・北原A、B遺跡・鑄物師屋遺跡等）が確認されているが、扇状地における遺跡の一般的なあり方は、やはり平安時代以降遺跡が進出する事を示している。古墳時代の遺跡は台地裾部（曾根遺跡）及び湯泉列に沿って認められる程度であるが、平安時代になると町内全域に遺跡が営まれ、台地上にも再び進出する。近世の遺物は現在の集落と重なる分布状態を示し、現在の集落の成立時期を暗示している。

ところで、律令体制下では、本町内南半部から甲西町・増穂町にかけては『和名類聚抄』に甲斐國・巨摩郡九郷の一つとして所載されている「大井郷」に比定されている。また北半部からさらに御勅使川扇状地にかけては、平安時代から鎌倉時代にかけて「八田御牧」の一部をなしていたと考えられている。律令体制の崩壊後、甲斐国では甲斐源氏の一族が強大な勢力を持つに至るが、本町一帯は、小笠原（櫛形町）、加賀美（若草町）、秋山（甲西町）などの地名が示す様に、その一族が居館（伝小笠原氏跡）を定めた地である。小笠原氏の祖小笠原長清に關係する遺跡は町内各所に残されており、また上野の台地上には小笠原氏の一族上野氏や、後、戦国時代に武田大井氏が捉った櫛城が僅かに痕跡を止めている。町内にはその時代を物語る山城（中野城・笹巻）や石造物が各所に残され、中世以来の伝統や文化財を伝える社寺が多く現存している。江戸時代になると、西郡の中心として、駿信往還の要所として発展するがその姿は『甲斐國志』や『村明細帳』にうかがうことができる。現在の集落の基礎はこの時期に形成されたものであろう。近代にはいり、明治4年（1871）山梨県が成立して以降、幾多の曲折を経たが最終的には昭和29年（1954）小笠原町、櫛村、野之瀬村が合併し、さらに昭和35年（1960）豊村を併せて、現在の櫛形町に至っている。



第3図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 [1 / 25,000]

第Ⅲ章 発見された遺構と遺物

第1節 発見された遺構

今回の調査で確実に認定しうる遺構を検出したのは1区のみであった。

1. 土 壤

1号土壤（第7図、図版3）

1区西端部に位置する。暗褐色ローム質粘土層上面から掘込まれている。平面形は長方形を呈し、各隅部は丸みを帯びている。規模は長辺2.3m、短辺1.9mを測る。深さは0.7~0.9mで、断面形は円筒形を呈し、壁は全体的にオーバーハングしている。覆土は3層に分けられ、拳大から子どもの頭大の礫が充満していた。時期を確定しうる遺物は検出しえなかつたが、中近世の墓壙である可能性が高い。

2号土壤（第7図、図版4）

1区北端部に位置する。現耕作土直下から掘込まれている。平面形は不整形を呈し、規模は長さ2m以上を測る。深さは0.3~0.4mで、浅鉢状の断面を示す。覆土は1層で拳大の礫が充満しており、人為的に埋められたものと考えられる。

2. 溝状遺構

1~8号溝状遺構（第5・6図、図版2・3）

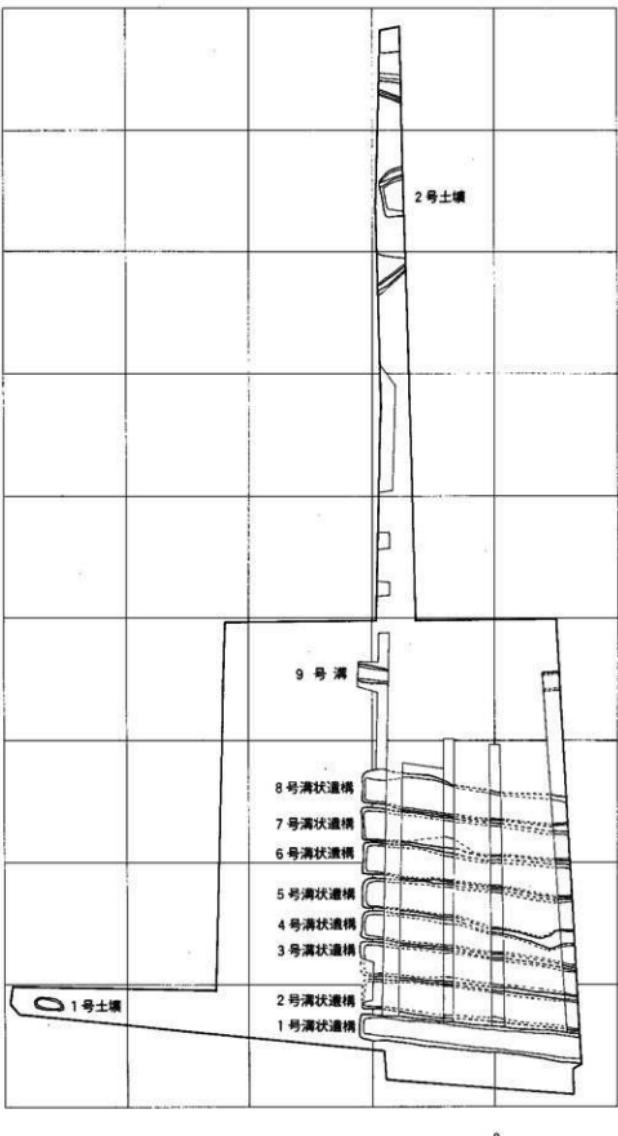
1区東南端に位置する。ほぼ同規模、同形状の8本の溝状遺構が接する様に東西に連なっている。試掘時にM区2及び4グリッドで2本の溝が並んで東西に走っているのを確認しているが、今回調査で検出された1及び2号溝がそれにあたる。

各溝ともほとんど同じ形状、規模を示している。幅は2.5~3.0m、深さは0.8~1.0mを測る。各溝の西端部は非常に掘っており、現在の畑境に見事に一致していた。溝の断面形はほぼ方形断面を呈し、壁は垂直に近く直状にたち、底面はフラットである。溝は地山の暗茶褐色ローム質粘土層中に掘込まれ、各溝とも底面をわずかに1及至2cm掘りすぎると、地山の細砂礫層に到達する深さで止められていた。各溝間の間隔は0.2から0.5mで人がやっと歩ける程の幅しかない。5・6号溝間の一部は、壁を2、3cm削りすぎると隣の溝に突き抜ける程接していた。覆土は、各溝によって微妙な差異は存在するが、基本的には図5・6の様に26層に分けられた。

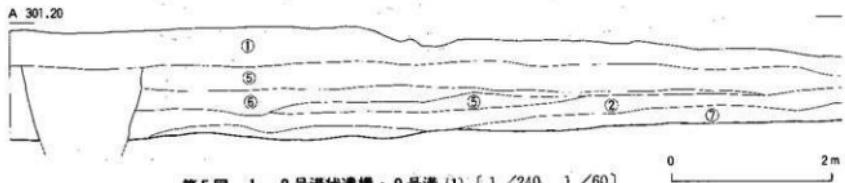
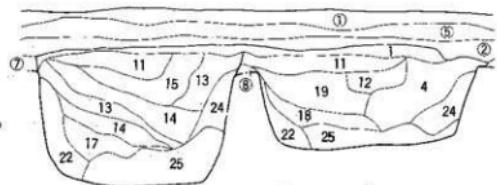
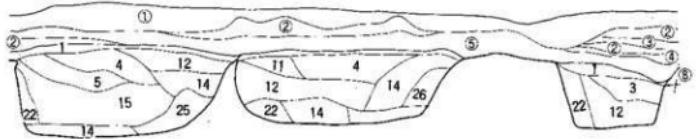
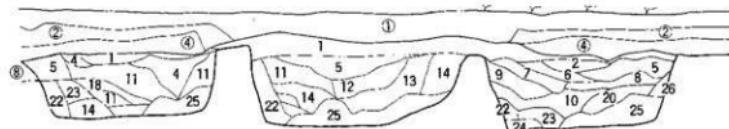
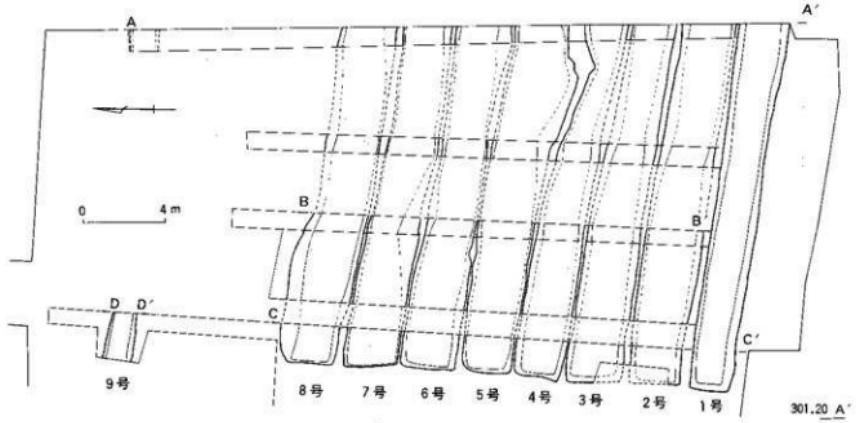
各溝とも、人頭大の礫を含む土砂(14・25・26層)は南側から埋没過程の初期の段階で流入し、後に北側から礫、砂礫が互層をなして流入している。さらにその上部には厚さ10~20cmにわたって暗茶褐色粘土質が溝を覆う様に認められた。この粘土質は各溝の上部ともほとんど同じ状態で、例えば3・4号溝の間に後に後に擾乱を受けたと思われる部分以外では平面観察時に違いを認識する事はできなかった。サブレンチによる溝検出後の土層断面観察によって、はじめて細礫の混入度の相違などといった微妙な違いを観察する事ができた。土層堆積がきれいな流れ込みの状態を示す等疑問点はのこるが、溝を覆う粘土質の存在、各溝の埋没状況が描いすぎていることなど人為的なものである感拭いきれない。

9号溝（第5・6図、図版4）

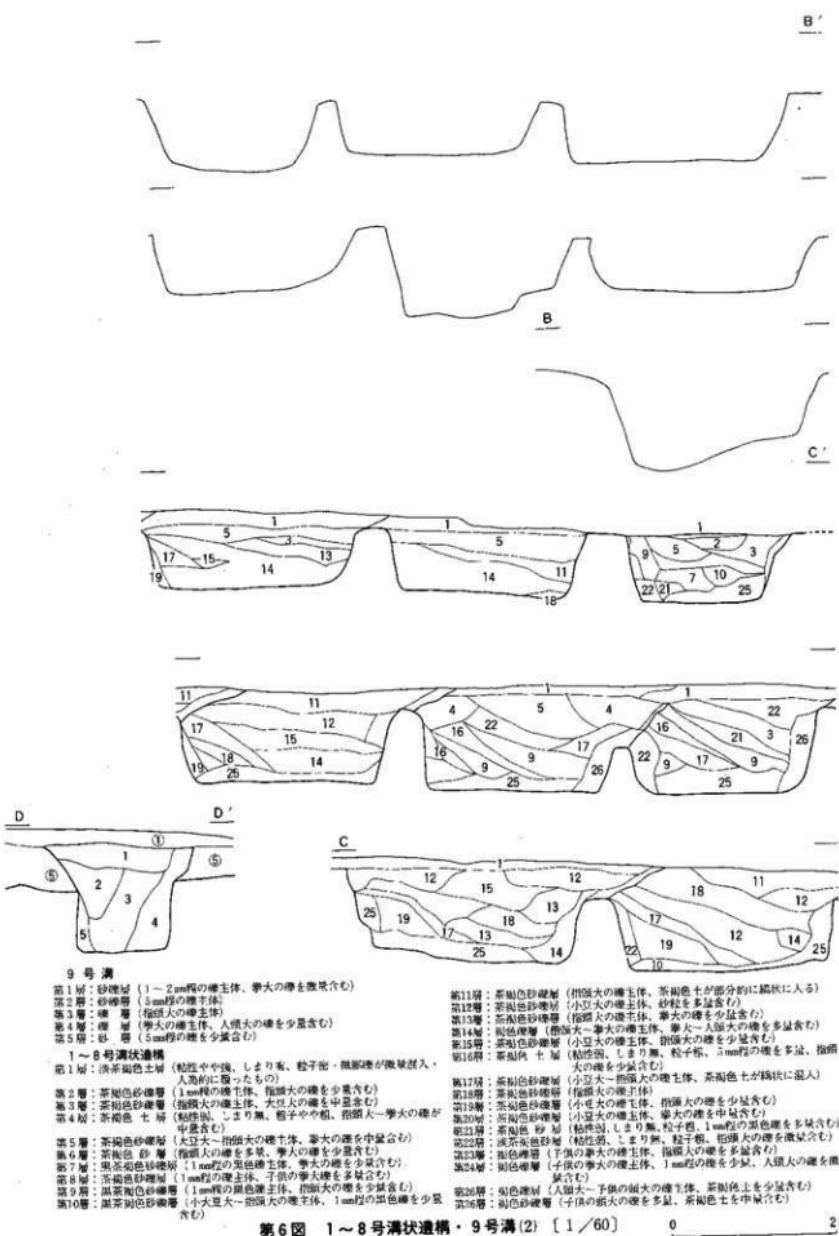
1~8号溝の北、7m程から検出され東西に走る溝である。試掘時にM区5グリッドで東西に走っているのを確認した溝である。幅は上部で1.8m、底部で1.1mを測り、深さは1.4mを有する。掘込面は耕作土直下である。断面形は、上面から0.6m程でロート状にせばまりを見せるが、これはこの部分が礫層に掘り込んでいたため壁の崩落が激しかったためと思われる。それ以下では壁は垂直に立ち、底面はフラットである。覆土は5層に分けられたが、全て砂礫層で一時的に埋没したものであろう。

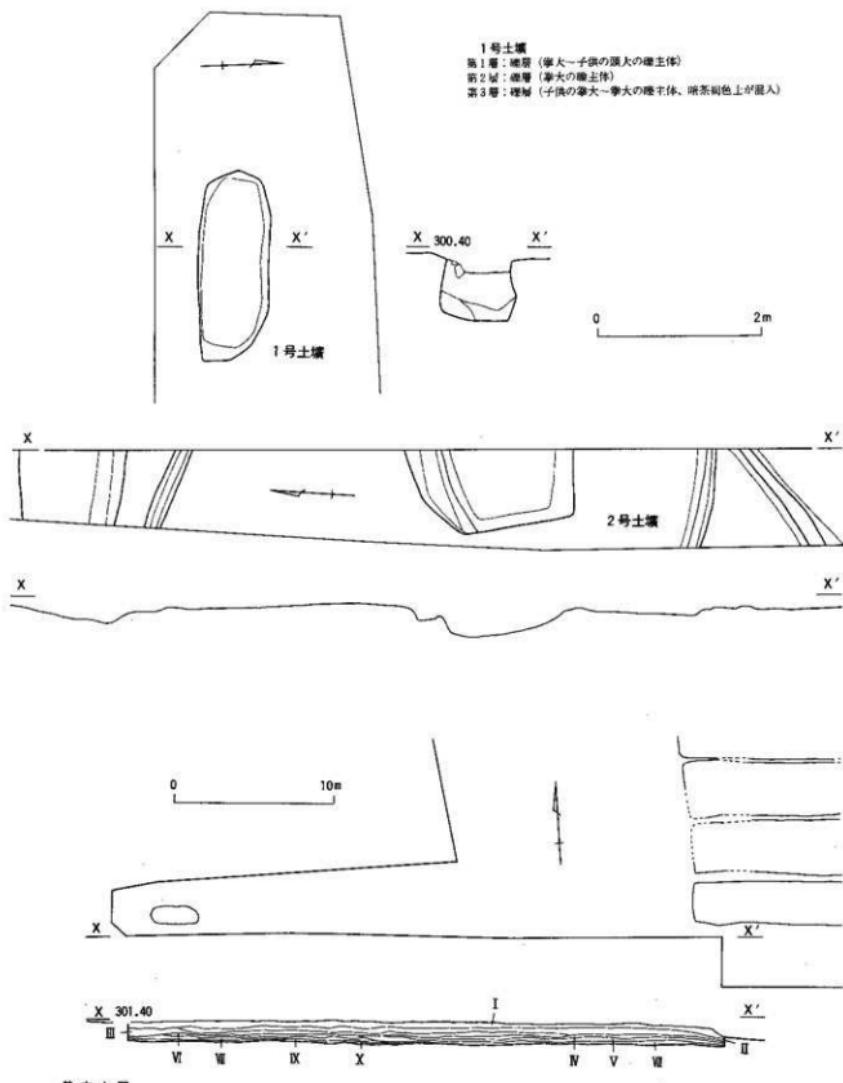


第4図 桜平B遺跡全体図 [1/400]



第5図 1～8号溝状遺構・9号溝(1) [1/240, 1/60]





基本土層

- I層：耕作土
- II層：新褐色土層（粒性やや有、しまりやや有、粒子粗、拳头～拳头の礫が多く混入）
- III層：砂礫層（拳头大的礫主体）
- IV層：棕褐色層（大頭大的礫主体）
- V層：棕褐色層（拳头大的礫主体、指頭大的礫混入）

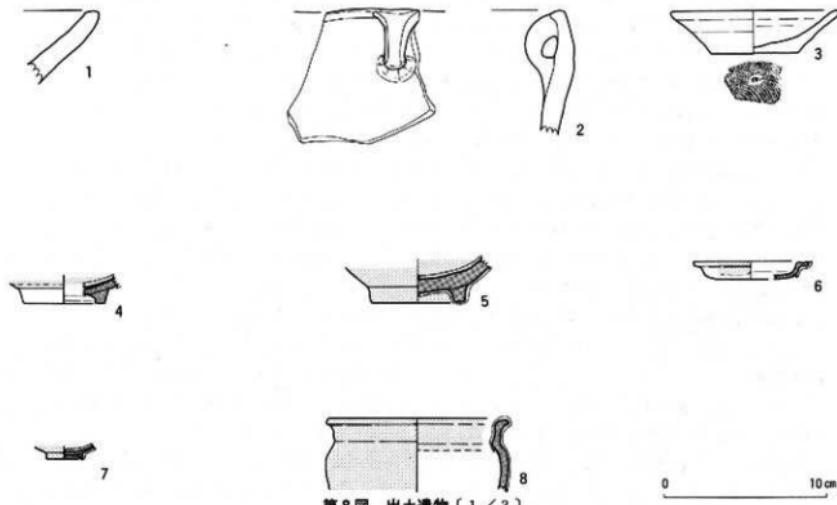
- VI層：砂礫層（砂を多く含む）
(指頭大的礫主体、砂が混入、部分的に拳头大的礫が入る)
- VII層：砂・層
(砂を多く、拳头大的礫が多量に混入)
- IX層：棕褐色土層（ローム質）

第7図 1・2号坑及び基本土層図(南壁) [1/60, 1/300]

第2節 出土した遺物

今回の調査で発見された遺物はごく少數であった。また、細片化も進んでいたため図化したものもわずかであった。

- 1 鉢の口縁部破片である。胎土に金雲母と細砂粒を多く含み、固く焼き締められる。色調は淡茶褐色を呈し、外面には煤が付着している。表面にはロクロ成形痕がよく残る。
- 2 内耳土器の口縁部破片である。胎土に雲母、長石を多量に含み、焼成は良好である。色調は外面暗茶褐色、内面淡茶褐色である。
- 3 かわらけ片。1／3ほどが遺存し、口縁部径10.3cm、底径5.4cm、高さ2.7cmである。色調は明赤褐色を呈し焼成は良好、胎土は密である。体部はナデ、身こみ部はヘラ状工具による回転ナデ、底部は回転糸切りである。体部は反り気味に立ち上がり丁寧な造りである。
- 4 高台付茶碗の底部である。底径5.8cm、高台径5.1cmを測る。内面には茶色から黒色系の釉が厚く施され、いわゆる天目茶碗であろう。外面は淡茶褐色でロクロ成形痕がよく残る。一部に釉の痕跡が残り、底部の他は釉が施されたものであろう。
- 5 青磁の茶碗底部。かなり厚手の造りで、底径、高台径とも5.8cmを測る。胎土は密であるが、やや灰色味を帯びる。
- 1から5は、16世紀代戦国末から江戸初頭の所産であろう。
- 6 浅い盤状の陶器である。口縁部径7.1cm、底径4.2cm、器高1.1cmを測る。色調は茶褐色、胎土は密、焼成は良好である。口縁部から体部外面に淡茶灰色系の釉が施される。近世後半の所産であろう。
- 7 ごく小さな碗の底部で、底径は2.2cmである。きれいな白色釉が施される。
- 8 小型壺の口縁部破片である。口縁部径11.2cm、肩部径11.1cmを測る。口縁部内外面、胴部外面は淡青灰色の胴部内面は白色の釉が施される。胎土は密、焼成は良好である。
- 7・8は近代初頭のものであろう。
- 1は1号溝状造構覆土から、2は2号溝状造構覆土から出土した。他は全て確認面上位の一括出土遺物である。



第Ⅳ章 調査の成果と課題

平成4年度における試掘調査の折りには完形の雁股轆、かわらけ片等が出土したこともあり、中世所産の遺構・遺物が期待された。今回の調査はその際、遺構等が確認された地点を中心に実施されたが、断片化した戦国末期の遺物を発見したほかは初期の目的とした遺構を確認する事はできなかった。しかし、近代初頭と考えられる溝状造構等を発見する事ができた。ここに若干のまとめを行いたい。

1区の東南端部から非常に密集した8本の溝状造構が確認された。この溝状造構の一部は試掘調査時にも確認され、またこの区では中世所産の遺物が発見されたこともあり、同期の遺構とも考えられた。前述した様に、この溝状造構はほぼ同規模、同形状のものが8本接する様に東西に連なり、各溝状造構はそれぞれ幅は2.5~3.0m深さは0.8~1.0mを測る。各溝状造構は地山の暗茶褐色ローム質粘土層中に掘込まれ地山下層の細砂礫層に到達するわずかに上部で止められていた。各溝状造構間の間隔は0.2~0.5mで人がやっと歩ける程の幅しかなく、また底部では水が流れた跡も確認できなかった。溝状造構8本全体の形状からみても、溝状造構自体で区画用に用いるとか、水を流すといった用途に使われたものとは考えられず、つまり溝を穿ったとするよりも、地山に含まれるローム質粘土を採集するため溝状に掘ったものと考えたい。このことは、覆土が人為的に埋められた可能性があること、さらにその上部には厚さ10~20cmにわたって暗茶褐色粘土が溝状造構を覆う様に認められたことなどからも推察される。さらにこの各溝状造構上部の粘土は全ての溝状造構を一気に覆ったものではなく、南の1号溝状造構から順次その上部を覆う様に観察される。つまり溝状造構1本ずつを、南から掘っては埋め掘っては埋めと繰り返した結果であろう。また、遺構の年代については、確實に伴う遺物がなく明確にしえない。1・2号溝状造構覆土からは戦国末と思われる遺物が出土しているが、流込みの可能性が非常に強い。基本土層の観察では、この溝状造構の上面では耕作土下にみられる茶褐色土が観察できず、比較的最近掘削された可能性を窺わせる。

では、何の目的でまた何故に規則的に土を掘り出したのであろうか。

1~8号溝状造構の北で、不整形の2号土壤が検出されているが、この土壤も暗茶褐色ローム質粘土層中に掘込まれたものである。櫛形町内の甲西バイパス建設予定地内遺跡からも同形態の土壤や、幅2~3mで長さ4~5mの土壤が多数検出され、近代初頭の粘土探集用の土壤⁶とされており、この2号土壤も同じ目的のものと考えられる。櫛形町の隣町若草町は近世初頭から瓦造りが盛行した地域で、今でこそ三州（愛知県）から原料を調達するが、かつては地元の粘土を採集した⁷とのことで櫛形町内にもその痕跡が残っている。この1から8号溝状造構も、瓦の原料としてローム質粘土を採集した結果である可能性が高い。

このように溝状に長く粘土を採集した場合、前記した土壤状に採集するのに比し一度に何倍もの土が採掘できる。それに一定の断面（幅と深さ）を持つ溝であれば土量計算もしやすかったのではないかろうか。また一定の区画内の粘土を採掘する場合、区画の端から溝状にしかも溝を接する様に掘り進む方法が一番無駄のない方法と思われる。ところで、この遺跡の様に烟一枚にも及ぶ範囲で粘土を採掘した場合、埋め戻した後の表土（耕作土）の保水性はかなり悪化することが予想され、溝上部を覆った粘土層はその対策として行なわれたのであろう。これらは、粘土を採掘する人間と、その土地を所有する人間との関わりの一部を表現しているのではないかろうか。

今回の調査では、さらに一基のみとはいえ中・近世の遺構を発見する事ができた。他の箇所では、立会部分も含め遺構を検出することはできなかったが、この柿平地区に当該期の遺跡が存在することは明確にしえたものといえよう。その明確な時期、性格は明らかではないが、この地区に代表される扇状地内においても遺構の存在を確認したことは今後の櫛形町内の遺跡を検討するうえで貴重な事例といえよう。

以上の様に、今回の調査では粘土の採掘場といいわば特殊な遺構を発掘したのであるが、今回の成果は近代初頭における産業の一環と、それをとりまいた地域社会の関係の一部を考古学的に明らかにした作業といえ、今後の地域社会研究の一助となれば幸いである。

附 章 これまでの町内遺跡調査の成果

第1節 伝嗣院原遺跡の調査

1) 調査に至る経緯

山梨県では県内を一巡する広域農道の建設を計画しているが、昭和62年度から富士川西部地区柳形工区の建設にかかることとなった。まず第1年度において伝嗣院原遺跡ののある市之瀬台地を開析する深沢川にかかる橋脚を建設する事となつたため、山梨県県中土地改良事務所、山梨県文化課、柳形町産業振興課、柳形町教育委員会において、埋蔵文化財保存のための協議、現地踏査を実施した。その結果、昭和62年度においては伝嗣院原の50m(約500m²)の区間にについては発掘調査を実施することとし、柳形町教育委員会が担当することとした。

調査期間 昭和62年2月8日～同月9日

調査面積 約320m²

2) 遺跡の位置と環境

伝嗣院原遺跡は柳形町上宮地字伝嗣院原に所在する。

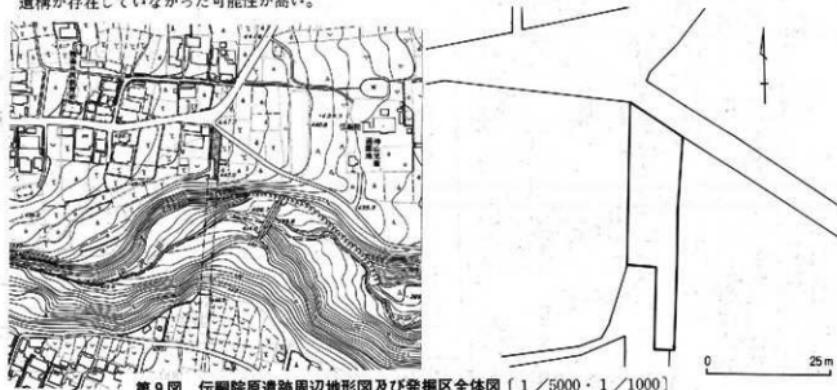
柳形町の中央部は、甲府盆地形成にかかる最新の断層運動によって形成された市之瀬台地が占めている。台地は扇形を呈しているが、幾つかの小河川によって開析されて小台地に分けられており、伝嗣院原は台地中央やや北、深沢川の開析した深い谷を南に臨む位置にある。

市之瀬台地には、六科丘遺跡・長田口遺跡・上の山遺跡等先土器時代から弥生時代終末までの遺跡が知られている。台地先端には物見塚古墳・六科丘古墳等の前期古墳がならび伝嗣院原に北隣する御崎に所在する船荷神社裏にも古墳が存在している。また遺跡東には隣接して伝嗣院が存在する。現在はわずかに庫裡を残すのみであるが、中世においては名刹として知られ、広大な伽藍を有していたと伝えられる。

3) 調査の経緯と成果

調査はグリット法とトレントと併用した。発掘区北半30m程は10×10mのグリットを設定して全面的に調査を実施し、同南半部は2×20mのトレントを設定し、遺構が確認され次第拡張することとした。表土は重機で掛けし後人力によって精査を行った。

今回の調査区は、表土が著しく薄く北半部で20cm、南半部では5cm程でハードローム面となってしまった。そのため遺構は検出できず、南半部トレントから昭和初期の水路の痕跡が発見されたのみである。また土器片も4点発見したにすぎなかった。すべて小破片で復元しえないが、1点は土師器、他は縄文中期所産のものである。この市之瀬台地上では、通常ローム面をかなり掘込んで遺構を構築することから考えて、今回の調査区の中には遺構が存在していない可能性が高い。



第9図 伝嗣院原遺跡周辺地形図及び発掘区全体図 [1/5000・1/1000]

第2節 小笠原警察野之瀬警察官駐在所建設用地内（清水C遺跡）試掘調査

1) 調査に至る経緯

山梨県警察、小笠原警察署は柳形町上市之瀬に所在する野之瀬警察官駐在所の老朽化に伴い、やや離れた場所に新築する計画をたてた。たまたま同地は、清水C遺跡として周知されていた埋蔵文化財包蔵地内に含まれていた。地形現状からは次に述べる様に、遺跡の可能性は低かったが現地踏査において若干の土器片が採集されたため、万全を期し試掘調査を実施することとした。柳形町教育委員会が担当することとした。

調査期間 平成2年6月4日

調査（試掘）面積 約12m²

2) 遺跡の位置と環境

遺跡は柳形町上市之瀬字清水に所在する。

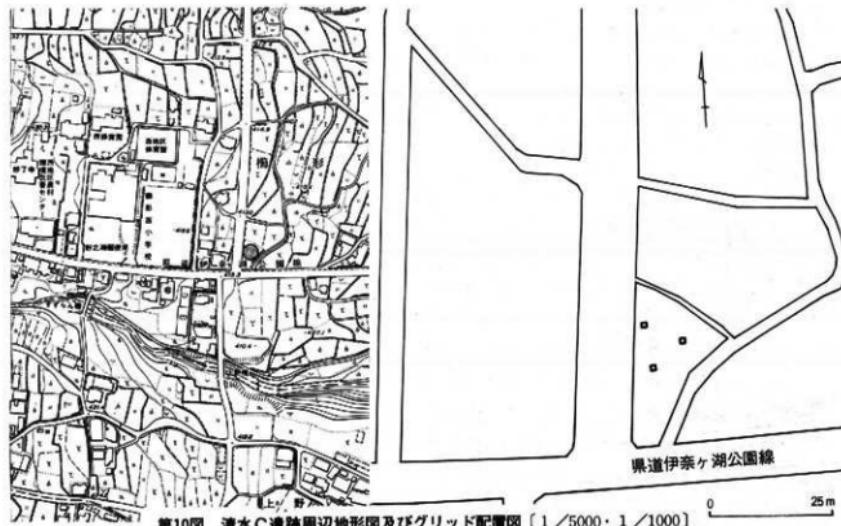
柳形町の東半部は、柳形山とその前面に発達した市之瀬台地が占めている。台地は扇形を呈して大きく折がっているが、その上面は柳形山から流れ降る小河川によって開析されて幾つかの谷と小台地に分けられている。清水遺跡は市之瀬川と漆川につくられた谷状地上端部に位置し、南に市之瀬川、北に漆川と両河川に挟まれている。

市之瀬台地の平坦面には、六科丘遺跡・長田口遺跡・上の山遺跡等先土器時代から弥生時代終末までの遺跡が知られている。清水遺跡は、北東に六科丘遺跡、南東に上の山遺跡を眺める位置にあり、南臨する市之瀬川の対岸絶壁上には上野城が築かれていた。また遺跡を西に50m程進んで尾根状にふくらんだ位置には、妙了寺が存在し中世からの大寺院として知られている。

3) 調査の経緯と成果

駐在所敷地が316m²と狭かったため、建物建設予定地内に3ヵ所の試掘坑を設定し、掘削の進展に合わせ必要が生じれば拡張することとした。

調査は全て人力で掘削した、しかし全ての試掘坑において地表下40~50cmで市之瀬川の氾濫によるものと思われる疊層にあたってしまった。疊は上部では人頭大であったが、10~15cm掘り進むと長径1mに及ぶ疊が重なって堆積していたため調査を完了した。



第10図 清水C遺跡周辺地形図及びグリッド配置図 [1/5000, 1/1000]

第3節 山際住宅団地造成地内（善徳院横遺跡隣接地）試掘調査

1) 調査に至る経緯

山梨県住宅供給公社では、平成3年度において櫛形町山寺山際地内で総数68戸にのぼる住宅団地造成事業を計画した。同地東には善徳院横遺跡が存在し、地元の古者の話では周辺で井戸掘削時に土器を発見しているとのことでもあった。そのため櫛形町教育委員会は、山梨県住宅供給公社と埋蔵文化財保護についての協議を行い、事業予定地東半部について試掘調査を実施し、遺跡と確認された場合は別途対応を講ずることとした。

調査期間 平成3年4月10日～同月25日

調査面積 約48m²

2) 遺跡の位置と環境

櫛形町の市街地小笠原は、櫛形山から流れ出た河川の形成した扇状地上に成立っている。山寺地区は小笠原から扇状地を西に登った位置にある。今回の事業予定地は深沢川、滝沢川の形成した扇状地の西側縁部にあたり、市之瀬台地との傾斜変更線に近い。この扇状地内では数ヶ所の遺跡が知られ^{**}ており、過去において試掘調査を実施^{**}してきたが、明確な遺構の発見はなしえていない。この山寺、小笠原地内には小笠原氏館跡、庭脇源寺等中世から近世にかけての遺跡が期待されているが現在のところ確認されていない。

3) 調査の経緯と成果

住宅団地造成事業地は、15600m²に及んでいるが、前述した様に造成事業地は善徳院横遺跡よりやや西にずれて位置していることもあり、事業地の東辺3200m²を試掘対象範囲とした。試掘は対象範囲内を16mの方間に区切り、2×2mのグリッドを設定した。グリッドは18ヶ所設けたが、諸般の事情から実際に調査したグリッドは12ヶ所であった。掘削はすべて人力によって行なった。第4グリッド以外は、地表下50～90cmで砂礫層に達し、それ以下は砂層及び礫層が互層をして厚く堆積していた。特に第8・7・10グリッドで認められた13層は子供の頭大の礫が主体となる層である。耕作土層と砂礫層との間も小礫を多量に含む土層であったが、2～9層ではローム粒を含む暗黄褐色土層が認められ、わずかながら遺物も出土している。そのため遺構の発見も期待されたが検出することはできなかった。遺物は、弥生時代、中世所産の土器であるが磨耗が激しく図示しえない。

第4節 善徳院横遺跡隣接地における宅地造成に伴う試掘調査

1) 調査に至る経緯

㈱博友は、櫛形町山寺地山際地内において宅地造成を計画した。同地は善徳院横遺跡に隣接し、過去の試掘調査^{**}でも遺構の検出はなしえなかつたものの土器を発見していた。そのため櫛形町教育委員会は、㈱博友に試掘調査の必要を説明し理解を求めた。協議の結果、試掘調査を実施し、遺跡と確認された場合は別途対応を講ずることとした。

調査期間 平成4年4月13日～14日

調査面積 約32m²

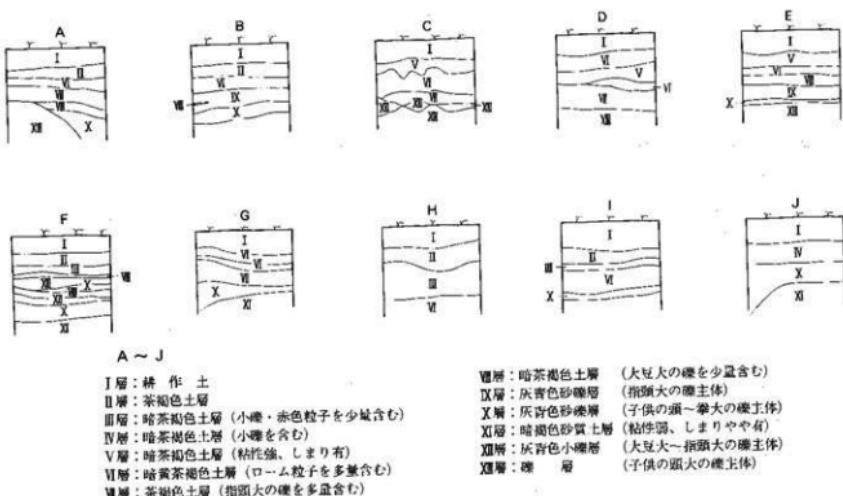
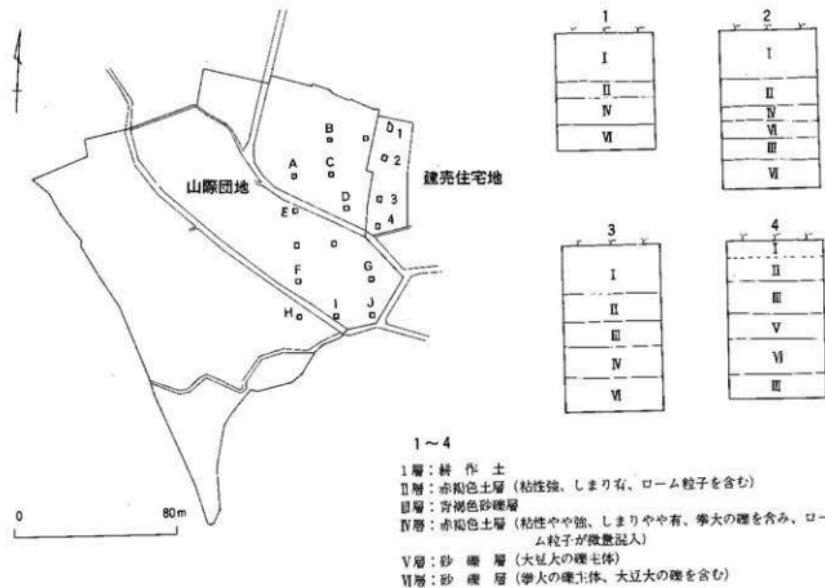
2) 遺跡の位置と環境

櫛形町の東半部を占める扇状地上で、山際住宅団地造成地と善徳院横遺跡に挟まれた位置にある。

3) 調査の経緯と成果

約1000m²の造成地の長軸に沿って15m間隔で、2×2mのグリッド4ヶ所を設定した。4グリッドとも、第1層耕作土の下層は赤褐色粘質土層となっている。さらにその下層は砂層及び礫層が互層をして厚く堆積しており、第4グリッドを重機によって深掘した結果、地表下4mまで達していた。

遺構は検出できず、遺物も磨耗の激しいものの数点を発見したのみである。



[1 / 2400 · 1 / 60]

第11図 山際住宅団地造成地内試掘グリット配置図及び土層化面概念図

第5節 切付遺跡の調査

1) 調査に至る経緯

櫛峠西開発は、櫛形町下市之瀬字切付において資材置場の建設を計画、埋蔵文化財の有無、取扱いについて櫛形町教育委員会に問合せた。現地は切付遺跡と重複しており、工事内容も土地の変更を含むということで有ったため、櫛形町教育委員会は山梨県教育委員会の指導のもと、建物敷地の調査の同周囲の試掘調査が必要である旨回答し理解を求めた。協議の結果、調査を実施し、櫛形町教育委員会が担当することとした。

調査期間 平成3年11月18日～同月29日

調査面積 約170m²

2) 遺跡の位置と環境

遺跡の所在する櫛形町下市之瀬字切付は、櫛形町の南部にあり櫛形山から流降った市之瀬川と漆川の造った扇状地上に位置する。遺跡は漆川から西へ20m程しか離れていない。今回の事業地は漆川河底とほぼ同じ高さにあり、漆川の河川改修がおわるまでは常に水害に脅かされた所である。遺跡南西30m程には、縄文中期、平安朝の大集落跡である鉢物師屋遺跡群¹¹が存在し、漆川を200m程遡ると狐塚古墳が存在している。

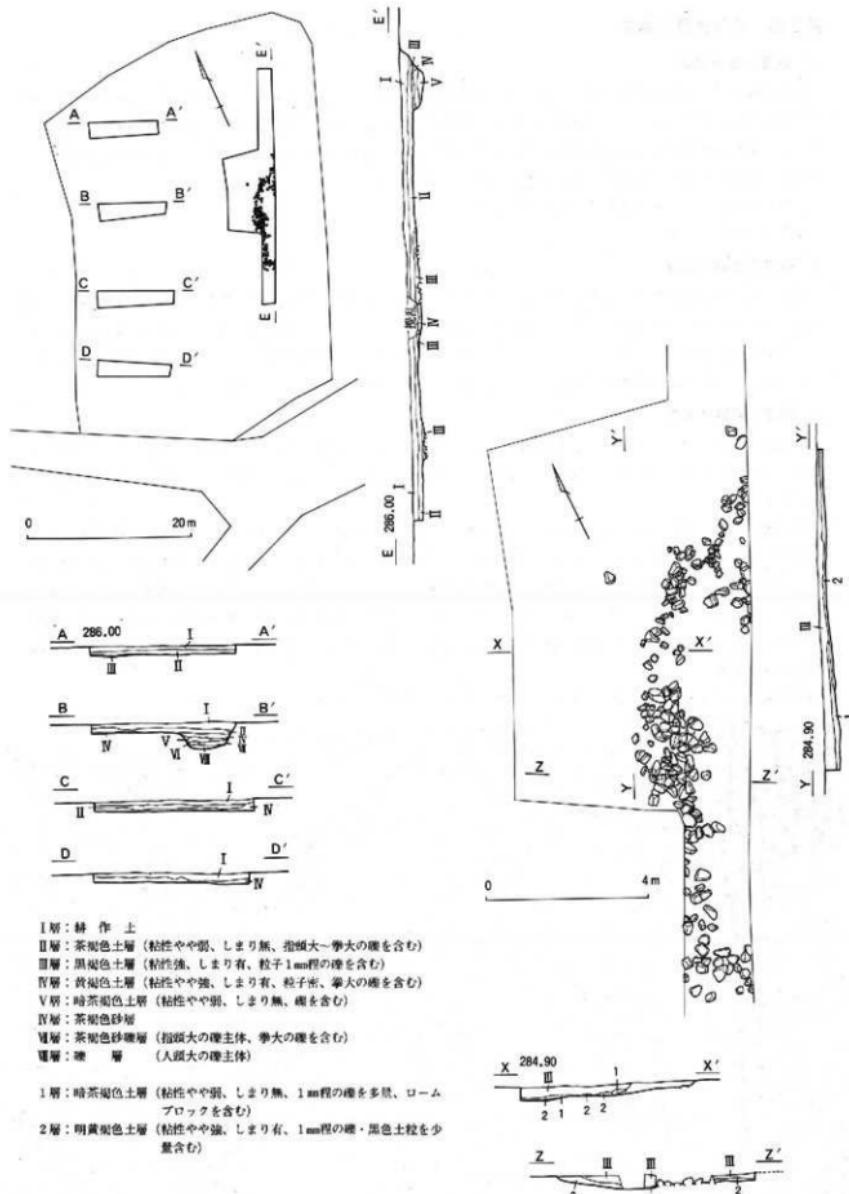
3) 調査の経緯と成果

建物建設用地約60m²は全面的に調査を実施し、そこから北及び南方向にトレンチを延長した。また用地西半部には2×9mのトレンチ4本を東西方向に設定した。調査は重機によって表土を排土し、後人力によって精査しつつ掘り下げた。

建物建設用地に重なる様に、集石遺構が検出された。規模は、南北8mで、東西は4mを残すが東半部はかなり壊され石の集まりが散漫になっていた。西側縁は緩く弧を描きよく残っている。石は基本IV層の上部に並べられ、人頭大からや小振りの大きさである。比較的平面的に並べられ、積重ねられた状態の部分はごくわずかであった。石のさらに上部には黒色土を主体とする土が覆っており、後世に削平された可能性は少ない。出土遺物は少なかったが、ほとんどは石の間に落ちこんだ状態で検出された。断片化が進み固化しえなかつたが、古墳時代後半期の遺物である。

敷地西半部に設定したトレンチからは、遺構・遺物とも確認されなかつた。





第13図 切付遺跡遺構全体図及びセクション図 [1/600, 1/300, 1/120]

第6節 パチンコ出店(ジャンボ)に伴う大新井C遺跡等の試掘調査

1) 調査に至る経緯

(仮)マルニシは、櫛形町桃園地内字大新居地内の通称焼軌道沿いにパチンコ店の出店を計画した。敷地東北隅が大新井C遺跡にかかるており、開発面積も約5000m²に及んでいた。そのため櫛形町教育委員会では文化財保護のため、遺跡該当部分及び建物建築部分については試掘調査が必要であると判断し、(仮)マルニシと協議に入った。その結果(仮)マルニシの理解を得て試掘調査を実施することとなった。

調査期間 平成4年4月23日～同月27日

調査面積 約94m²

2) 遺跡の位置と環境

遺跡は櫛形町桃園字大新居に所在する。

櫛形町東半部は櫛形山から流れ出た河川の形成した扇状地であるが、町内北半部は御勅使川の造る扇状地と一体となった大きな複合扇状地となっている。遺跡の所在する桃園地区は、この複合扇状地の扇端部にあたる。この扇状地上では従来遺跡の確認はなされていなかった。しかし、近年櫛形町内遺跡分布調査¹² 甲西バイパスに伴う七ツ打遺跡の調査¹³等の調査が実施され、中・近世の遺跡の存在が確認されつつある。

3) 調査の経緯と成果

調査方法はトレント法によって実施し、原則として耕作土を重機によって排土し、後入力によって掘り下げる方法で構成・遺物の発見に努めた。試掘は大新井C遺跡内では磁北に従ってトレントを設定したが、果樹が植えられていたこともあり、適宜移動した。またそのため重機も使用できず、すべて入力で排土した。建物建設用地内では建物長軸に沿って2本のトレントを設定し重機によって排土した。試掘面積は、前者では54m²、後者では40m²である。建物建設用地内北半部のFトレントでは地表下30cmで厚さ10cm程の黒色土層があったが、遺構、遺物は確認できず、同南半部のGトレントではこの層は検出できなかった。両トレントとも地表下60cm以下は礫、砂礫層が互層となっている。大新井C遺跡内でも地表下60cm程で砂礫層にあたる。ここでは耕作土を除き、土層堆積が鉛錆しており、扇状地内の土砂堆積の様相を示しているものといえる。遺構も小破片をわずかに得られたのみである。

第7節 ケーヨーホームセンター建設用地内遺跡確認調査

1) 調査に至る経緯

(株)ケーヨーでは、櫛形町桃園字八反畠において櫛形町ショッピングセンターの建設を計画し、平成4年度の出店をめざしていた。該当地は埋蔵文化財包蔵地からは外れていたが、周辺に50mほどに3ヶ所の遺跡が存在していた。そのため櫛形町教育委員会では、(株)ケーヨーと協議を求めていたうえ、建物建設用地内については試掘調査を実施する事とした。

調査期間 平成4年6月29日～7月5日

調査面積 約300m²

2) 遺跡の位置と環境

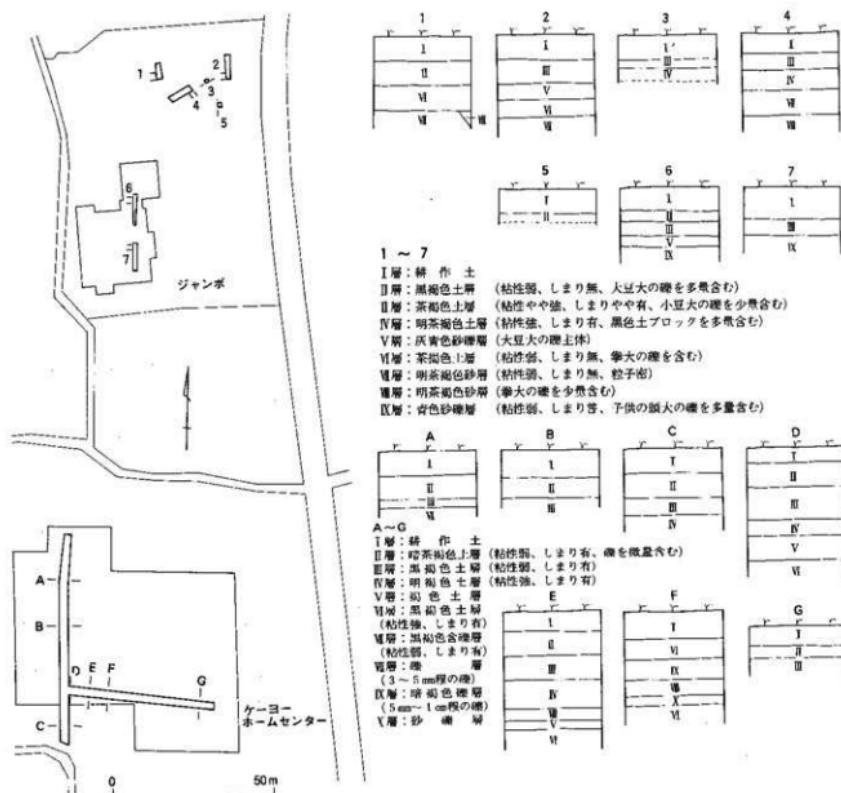
遺跡は櫛形町桃園字八反畠に所在する。

この建設予定地は、前節で説明したパチンコ店(ジャンボ)に南隣しており、御勅使川の造る複合扇状地の扇端部にあたる。この扇状地上では従来遺跡の確認はなされていなかった。しかし近年の調査に伴って、中・近世の遺跡が期待されるることは前節で述べた通りである。

3) 調査の経緯と成果

試掘調査は、建物建設地内にT字形に2本のトレントを設定して行った。トレントは南北に3×60m、東西に3×45mの2本である。重機によって表土を排土したが第3層が黒褐色土に変化したため、後入力によって精査しつつ掘り下げる。

該地は扇状地上であり、先に試掘を実施したパチンコ店出店予定地等の側から礫層が厚く堆積しているものと予想していた。しかし、ここでは黒褐色土層（3・6・7層）間に褐色ローム質土が挟まれた状態で堆積し、礫、砂礫層は東西トレンチの東端部でようやく確認された。基本土層が黒褐色土層や褐色ローム質土層であったため、造構、遺物の発見に期待がもたらされたが1点の遺物も出土しなかったため、トレンチの拡張等は断念した。



第14図 大新井C道路及びケーヨーホームセンター建設用地内トレンチ配置図及び土層概念図 [1/1500・1/60]



第15図 大新井C、往還東A・B 通り跡周辺地形図 [1/6000]

第8節 農道4号支線2号線開設に伴う試掘調査

1) 調査に至る経緯

柳形町では、平成4年度に町内桃園地内において農道4号支線2号線の開設を計画した。同線は町内桃園地区を南北に縱断する様に敷設されるもので、総延長は約850mに及ぶ。路線内、及び周辺には5ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されていた。そのため柳形町教育委員会と農林振興課とは、埋蔵文化財の保護にむけて協議を行い、遺跡内及び周辺の試掘調査を実施することになった。

調査期間 平成4年3月

調査面積 約120m²

2) 遺跡の位置と環境

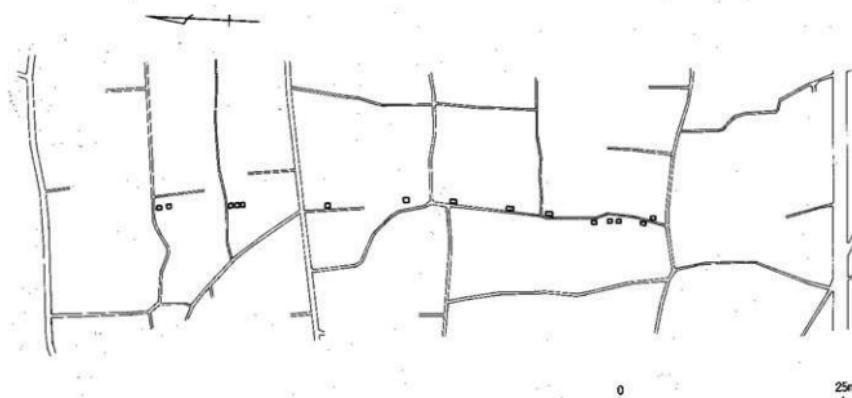
農道敷設予定地は柳形町桃園にあり、南から八反田、大新居、東原の各字にまたがっている。

柳形町は東半部は柳形山から流れ出た河川の形成した扇状地であるが、町内北半部は御動使川の造る扇状地と一体となった大きな複合扇状地となっている。遺跡の所在する桃園地区はこの複合扇状地の扇端部にあたる。この扇状地上では從来遺跡の確認はなされていなかった。しかし、近年の開発や調査の進展に伴い、中・近世の遺物を主体とする埋蔵文化財包蔵地が確認されている。

3) 調査の経緯と成果

今回の路線内及び周辺で確認されていた埋蔵文化財包蔵地は5ヶ所であった。その5ヶ所を中心いて、路線内に2×2m、2×4mのグリッド15ヶ所を設定し、全て人力で掘削した。八反田、大新居では地表下50~70cm程で砂礫層にあたり、以下疊層、砂層等が互層をなして厚く堆積していた。一番北の東原では砂礫層は確認しえず、黒褐色上層及び褐色ローム質土が確認された。そのためトレンチを拡張し、また地表下2m近くまで掘り下げた。

しかし造構、遺物は全く確認しえなかった。



第16図 農道4号支線2号線グリッド配置図 (1/5500)

第9節 ヤオハン建設用地内（往還東A・B遺跡）試掘調査

1) 調査に至る経緯

㈱ヤオハンジャパンでは、櫛形町小笠原及び十五所地内において大規模ショッピングセンター櫛形店の出店を計画した。ショッピングセンター予定地北西隅には往還東A・B遺跡が半分ほどかかるように存在していた。

また該当地は 83,000m² を上回る広大な面積であるため、未確認の埋蔵文化財 包藏地の存在も杞憂されたため櫛形町教育委員会では、㈱ヤオハンジャパンと埋蔵文化財保護のため協議を行った。その結果、建物建設地内を中心として試掘調査を実施する事とした。

調査期間	平成4年12月10日～同月25日
調査面積	約 750 m ²

2) 遺跡の位置と環境

ショッピングセンター予定地は櫛形町小笠原往還東及び雨久保から同十五所西原にかけて所在する。

櫛形町は東半部は櫛形山から流れ出た河川の形成した扇状地であるが、町内北半部は御動使川の造る扇状地と一体となった大きな複合扇状地となっている。ショッピングセンター予定地はこの大きな複合扇状地の扇端部にある。この扇状地上では從来遺跡の確認はなされていなかった。しかし、近年櫛形町内遺跡分布調査¹⁵⁾ 甲西バイパスに伴うツツ打遺跡の調査¹⁶⁾ 等が実施され、中・近世の遺跡の存在が確認されつつある。また、ここから東へ 700 m 程には弥生時代の方形周溝墓も発見され、注目を集めつつある地域である。

3) 調査の経緯と成果

この事業地は、83,000 m² と広大な面積であったが実際に埋蔵文化財包藏地と認識されていたのは、その北西隅 約 2000 m² であった。また第1次の建物建設用地も、事業地の西半部に偏っていた。そのため既確認の埋蔵文化財包藏地内と建物敷地内を中心として 2 m 幅のトレンチを地軸方位に従って設定した。さらに事業地東半部では基本土層の確認もかねて 4 × 4 m のグリッド12ヶ所を設定した。

調査は一部重機を使用して排土したが、ほとんどは人力で行った。ほとんどのグリッドでは30~40cmの耕作土の下位は砂礫層となり、重機によって 2~3 m 程深掘を行った範囲内 (G 1・2・31・39) では全て砂礫層であった。しかし北西隅の往還東B遺跡にあたる部分 (G11~18) では、耕作土下は黒褐色土が堆積していた。しかし、遺構は発見できず、遺物も近世陶器類が主体で細片化していた。また出土層位は、すべて耕作上中であった。

4) まとめ

今回迄の桃園地内における調査では遺構・遺物は全く発見できなかった。しかし、扇状地内の基本土層のあり方については新たな所見がえられたものといえる。扇状地にあつては、耕作土下部は基本的には礫・砂礫層が互層をなして厚く堆積している。しかし、2次堆積と考えられるロームが間層として存在する部分があり、また、黒褐色土層や褐色ローム質土層が堆積しているところもある。これまでの調査では、農道4分支線2号線内東原地区から、パチンコジャンボ南西隅部・ケーヨーホームセンター建設用地北半部を通り、往還東A遺跡（ヤオハン敷地北端部）で止まっているのが観察され、扇状地内で等高線にはば直交して筋状にみとめられる傾向にある。¹⁷⁾ 扇状地における微地形の観察、現集落との関係も含め今後参考に倣するものといえる。



第17図 ヤオハン建設用地内グリッド配置図及び土層概念図 [1/3000, 1/60]

第10節 宝珠寺収蔵庫建設用地（宝珠寺遺跡）の発掘調査

1) 調査に至る経緯

(宗) 宝珠寺に所蔵する「大日如来及四波羅蜜菩薩坐像」は平成3年度に国の重要文化財の指定を受けた。そこで(宗) 宝珠寺では、仏像の永久的な保存策として平成5・6年度に国、県、町の補助をうけ重要文化財の収蔵庫の建設を行うこととした。

ところで同寺一帯（西側）は、宝珠寺西遺跡として周知され、また境内には宝珠寺古墳が存在したとも伝えられてきた。さらに、同寺に関わる堂宇等の遺構が埋没していることも想定されたため、収蔵庫建設に先だって町教育委員会に依頼し建設用地（約55m²）内の発掘調査を実施することとした。

調査期間 平成6年3月15日～同月25日

調査面積 約85m²

2) 遺跡の位置と環境

遺跡は山梨県中巨摩郡櫛形町山寺950に位置する。櫛形町の中心部は櫛形山塊から流れ出た河川による扇状地となっている。本遺跡（宝珠寺）は、櫛形町の中心部である小笠原から西へ1.5kmほど進んだ扇状地上に存在する。

3) 調査の経過

調査は重機による表土の排土から開始した。掘削が北西隅に及んだ時点で表土（パラス層）下からかなりしまった層を確認したため、部分的に人力による排土に切り替え遺構確認のため精査を行った。しかしこの面（後にのべる版築面）は発掘区北辺から1m程遺存するのみで、また北西隅は水道工事等のために擾乱を受けていた。そのため、その他の部分は約50～60cmの深さまで再度重機によって排土し、後人力によって80cmほどまで掘り進めつつ精査した。なお南東隅は既存建物のコーラクリート基礎が、北西隅も墓への登り口のためのコンクリートがうたれしており、土地の改変がかなり進んでいた。

4) 調査の結果

① 確認した遺構

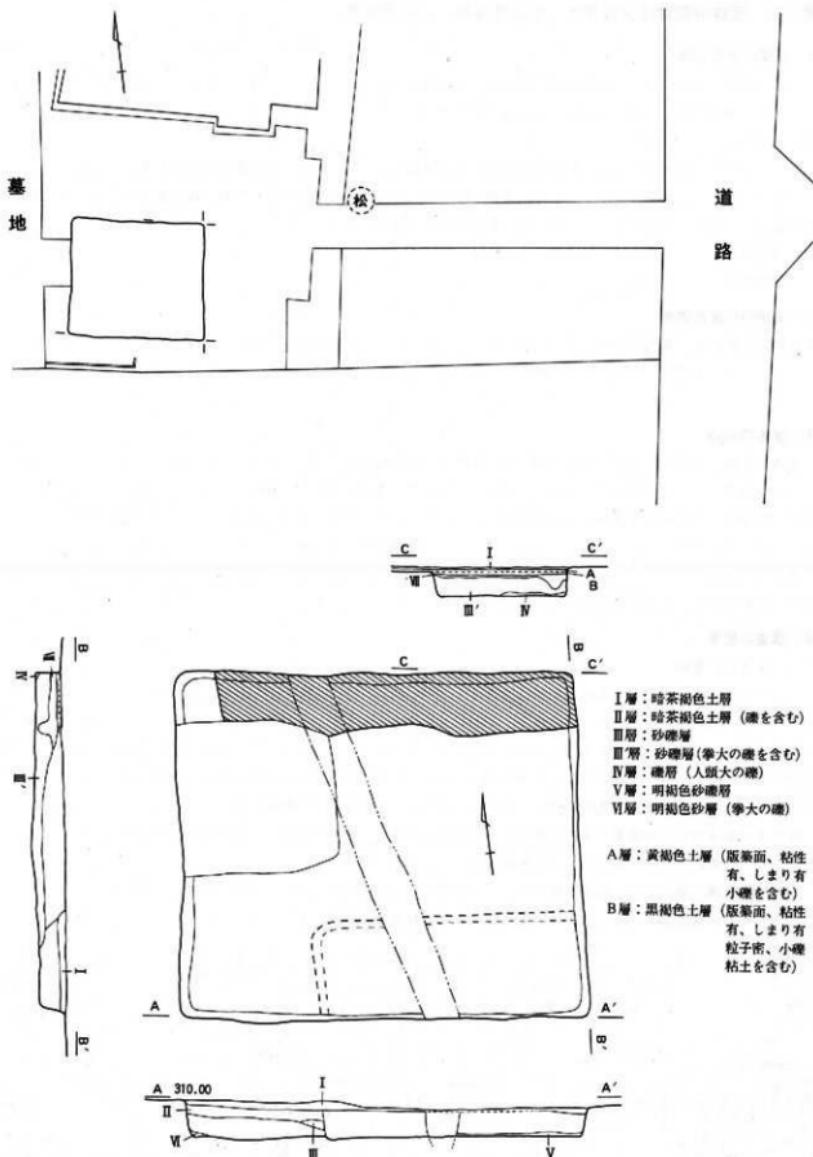
今回の調査で唯一確認した遺構は版築面であった。平面的には発掘区の北壁に沿って長さ6m、幅1～1.5mである。その他の部分では検出できなかったが、これは本来なかったものか、後世の土地の改変により失われたものか判断できなかった。この版築面は厚さ20cmを測り、上層はローム質の黄褐色土、下層は微細な砂利を含んだ黒褐色土であった。この黒褐色土下位にも厚さ20cmの明茶褐色土が認められ版築面の構築前に掘込まれたものである可能性が高い。この面から遺物等はまったく見いだされず、構築された時期に付いては明らかにできなかった。

現在大日如来及び四波羅蜜菩薩が安置されている毘沙門堂は、現在の場所より南側から移されたと云い伝えられており、位置的にはほぼ一致することは興味深い。

発掘区南東隅の擾乱部は、物置が建てられていた場所とほぼ重複していた。物置の基礎としてはかなり深いものであったが、擾乱部の底からはガラス瓶の破片なども検出され最近のものであろう。



第18図 宝珠寺周辺地形図 [1/5000]



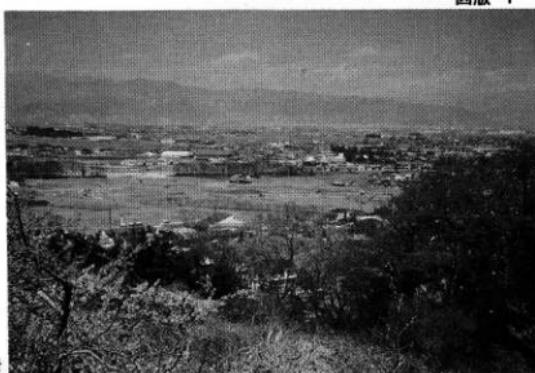
第19図 宝珠寺発掘調査全体図及びセクション図 [1/360・1/120]

引用・参考文献

- * 1 柳形町教育委員会 1990 柳形町文化財調査報告 No 8 「町内遺跡詳細分布調査報告」
- * 2 柳形町教育委員会 1989 柳形町文化財調査報告 No 9 「大畠遺跡」
- * 3 雄山閣 昭和43 大日本地図大系 「甲斐国志」
- 4 柳形町誌刊行委員会 昭和47 「柳形町誌」
- * 5 小笠原長清公資料検討委員会 平成3 「小笠原長清公資料集」
- * 6 柳形町教育委員会 1993 柳形町文化財調査報告 No10 「柿平土地区画整理事業地内試掘調査報告」
- * 7 山梨県埋蔵文化財センター 1994 「村前東A遺跡について」 村前東A遺跡現地説明会資料
- 山梨県教育委員会 1994 山梨県埋蔵文化財センター調査報告86 「大師東丹保遺跡」
- * 8 若草町誌編纂委員会 平成2 「若草町誌」
- 山梨県立巨摩高等学校 昭和51 「柳形山の自然」
- * 9 注1に同
- * 10 注2に同
- * 11 柳形町教育委員会 1995 柳形町文化財調査報告 No12 「鎌物師屋遺跡」
- * 12 注1に同
- * 13 山梨県教育委員会 1991 山梨県埋蔵文化財センター調査報告60 「七ツ打C遺跡発掘調査報告書」
- * 14 「柳形山の自然」(注7文献)でも県立巨摩高校校庭における扇状地内の暗褐色ハードローム質粘土の存在に言及しており、遺跡立地、歴史的土地利用の上からも再検討の価値があろう。
- * 15 注1に同
- * 16 山梨県教育委員会 1991 山梨県埋蔵文化財センター調査報告60 「七ツ打C遺跡発掘調査報告書」

報告書抄録

ふりがな	かきだいらびーせき											
書名	柿平B遺跡											
副書名	柳形町柿平土地区画整理事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書											
シリーズ名	柳形町文化財調査報告	シリーズ番号		No 13								
編著者名	清水 博											
発行者	柳形町教育委員会											
編集機関	柳形町教育委員会											
所在地	〒400-03 山梨県中巨摩郡柳形町小笠原397-1 TEL0552-82-0108											
発行年月日	1995年 3月30日											
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド 市町村 遺跡番号	北 緯	東 緯	調査期間	調査面積 m ²	調 査 原 因					
柿平B遺跡	山梨県中巨摩郡 柳形町小笠原字柿平	193909	35 度 36 分 35 秒	138度 22分 38秒	19940420 ~ 19941107	1,800	区画整理事業(柳形町 柿平地区)に伴う事前 調査					
ふりがな 所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項							
柿平B遺跡		近代初頭		土器、陶器	粘土探査							



(1) 柿平地区土地区画整理事業全景



(2) 柿平B遺跡遠景



(3) 柿平B遺跡全景



(1) 1号溝状遺構



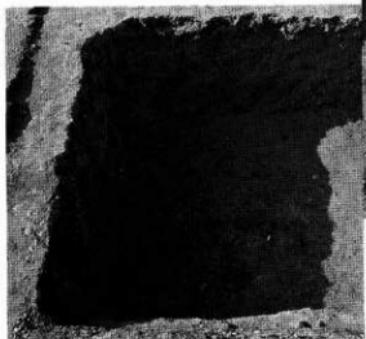
(2) 1号溝状遺構セクション



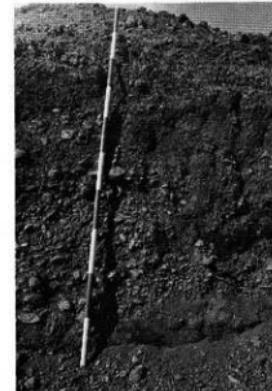
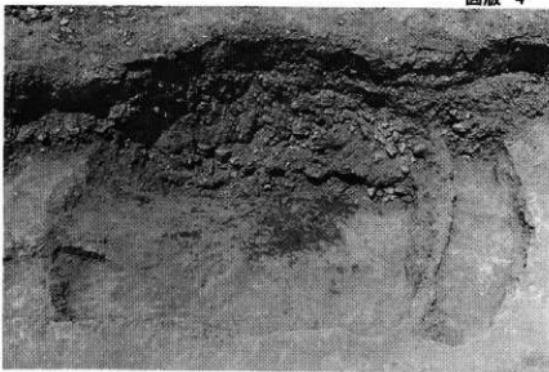
(3) 1号溝状セクション



(1) 1～8号溝状造構西端部



(2) 1号土坑



櫛形町文化財調査報告 No-13

柿平B遺跡

山梨県中巨摩郡櫛形町柿平B遺跡発掘調査報告書

1995年 3月20日 印刷

1995年 3月31日 発行

編集・発行 櫛形町教育委員会

山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原397-1

印 刷 野 中 印 刷

山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原
